

教育実践報告

児童・小学校教員を対象とした 外遊びおよび鬼ごっこに関する実態調査

橋詰 ゆり^{1, 2)}, 杉山康司³⁾

1. 愛知教育大学大学院・静岡大学大学院教育学研究科共同教科開発学専攻

2. 袋井市立浅羽北小学校 3. 静岡大学

Survey on outdoor play and tag for children and elementary school teachers.

Yuri Hashizume, Koji Sugiyama

要旨

子供の体力低下に対し学校体育の担う役割が非常に大きくなる中、体育科教材として鬼ごっこへの関心が高まっている。しかし、鬼ごっこと体力についての研究の多くは幼児を対象としており、小学生の実施状況は明らかにされていない。そこで、児童を対象とした休み時間の過ごし方並びに外遊びに関するアンケート調査と体育授業担当教員を対象とした聞き取り調査を行った。これらの実践から、鬼ごっこを分類並びに体育授業時に教員が配慮している事項の整理を行った。その結果、休み時間の外遊びにおいて鬼ごっこは男女ともに多くの児童に好まれていることが示され、児童の親しみのある鬼ごっこの種類について知見が得られた。

キーワード： 小学校体育 外遊び 鬼ごっこ

I. 緒言

児童・生徒の体力不足を引き起こす要因として、生活環境の変化が挙げられる。村瀬ら（2007）は、親世代に比べ子世代は屋外で遊ばない傾向が強くなっており、外遊び・スポーツ遊びの幅広い実践の促進には大人の関与による外遊びの紹介、奨励、支援が必要であると述べている。その背景としてテレビやメディアの影響が大きくなっていること、スポーツクラブ等に通う子供が増えていることを挙げている。研究報告から15年が経過しており、要因の衰退が考えられない事からも、これらの傾向は一層強くなっていると考えられる。一方で、静岡県教育員会は静岡県の小学生においておよそ半数の児童が学校体育でしか運動していないと報告している。体力低下や運動習慣の二極化といった子供の体力課題に対し、全ての子に保証された運動機会である学校体育の役割は大きいといえよう。特に小学校6年間の発育発達著しく、運動経験・技能の個人差にも配慮した上で全ての子に運動の楽しさを味わわせる授業づくりは決して容易ではない。加登本ら（2012）は、およそ50%もの教員が体育指導に困難さを感じ、特に若年層の教員ほどその割合が高いと報告している。加えて、教育現場の人手不足や多忙化が問題視（高島、2022）され、新型コロナウイルス感染症対策により様々な制限が課された以降は子供の体力低下への懸念は増すばかりである。学校における児童の主な運動機会には、体育授業と休み時間の外遊びが挙げられる。児童の休み時間の過ごし方や人気の外遊び

について調査することは児童の外遊び誘発並びに体力向上の一助となるに違いない。

古くから子供たちに親しまれてきた日本の伝承遊びである鬼ごっこは、外遊びの機会が減少している現代の子供たちにとっても数少ない身近な遊びの一つである。この鬼ごっこは、小学校体育科指導要領において低学年のゲーム領域に「鬼遊び」として例示（文部科学省、2017）されていることを筆頭に、アクティブチャイルドプログラム（日本スポーツ協会、2020）においても推奨され、スポーツ鬼ごっこの普及も進んでいる。さらに国語科の教科書に「鬼ごっこ」という説明文が扱われている（光村図書出版株式会社、2019）ことから多くの子供に馴染みのある遊びであることがうかがえる。鬼ごっこは決められたエリアの中を自由に走行し、鬼をかわしたり、鬼から逃げたりする遊びである。鬼ごっこにみられるこれらの動作はサッカーやバスケットボールといった球技スポーツにも通じると考えられる。複数単元に応用可能であり、準備が比較的容易かつ短時間で実施可能と指導者へのメリットが多く、子供たちに長年親しまれている鬼ごっこの体育的価値は非常に高いと考えた。先行研究において幼児期に鬼ごっこを行うことで反復横跳びやボール投げおよび立ち幅跳びにおいて運動能力が向上したという報告（花井ら、2019）や鬼ごっこを好む幼児は敏捷性能力に優れているという報告（宮口ら、2012）、鬼ごっこの実施はコーディネーション能力の向上につながる（郷家ら、2018）という報告がなされているものの、

小学生を対象とした研究は少ない。鬼ごっこは、かわり鬼や増え鬼、しっぽ取り鬼および手つなぎ鬼などをはじめ多様な種類があるが、子供の実施状況に関する研究報告はない。

そこで、本研究は体育科教材の開発に向けて児童へのアンケート調査と教員への聞き取り調査を行い、児童の休み時間の過ごし方と体育授業に用いられる鬼ごっこの種類並びに実施条件（鬼の人数および時間、広さ）について実態把握を目的とした。

II. 方法

1. 対象

S県西部地区の小学4年生57名（男児：31名，女児：26名）および2年生50名（男児：30名，女児：20名）を対象にアンケート調査を行った。教員への聞き取り調査は、該当地区で体育授業を担当する小学校教員8名を対象とした。研究の実施にあたり学校長に研究の内容を説明し、研究協力の許可を得た。その後、教員および対象児童とその保護者に対し文書および口頭で研究の主旨と研究方法、機器の安全性、データの扱い方等について説明をし、承諾を得た。

2. アンケート調査

質問項目は「①外遊びは好きですか」「②好きな外遊びはなんですか」「③休み時間には何をしますか」「④どんな種類の鬼ごっこをしますか」の4項目とした。

①は自記式4件法，②③は多肢選択法，④は体育授業と休み時間，それ以外（放課後の自由遊びなど）別に枠を設定し，自由記述で回答を得た。なお回答率はいずれも100%であった。

3. 聞き取り調査

小学校で体育授業を担当する教員8名に対し，授業でよく実施する鬼ごっこの種類および，鬼ごっこの種類を選択するとき配慮する事項について聞き取り調査を行った。得られた結果をもとに，分類軸を決定し，小学校で体育授業を担当する4名の教員と子供たちに

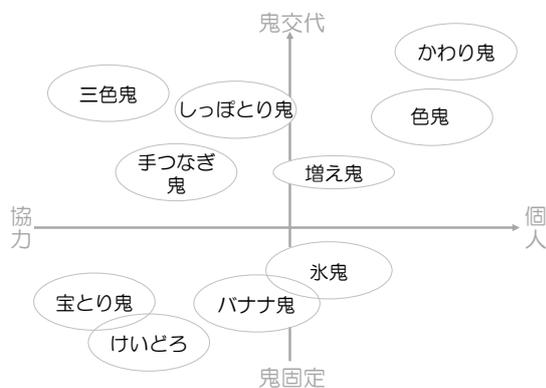


図1. 鬼ごっこの分類。

親しみがあり，よく行われている鬼ごっこ（児童および教員への調査より）を分類軸上にプロットした。作成したものを，教員8名で確認・修正を行い，鬼ごっこの分類をした（図1）。

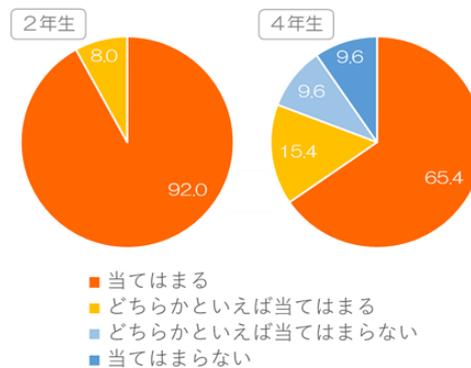
III. 結果

1. アンケート調査（図2）

①「外遊びは好きですか」

当てはまる，どちらかといえば当てはまる，どちらかといえば当てはまらない，当てはまらないの順に，2年生：92.0%，8.0%，0%，0%，4年生：65.4%，15.4%，9.6%，9.6%であった。肯定的な回答は，2年生では100%，4年生では88%だった。

Q1. 「外遊びは好きですか」



Q2. 「好きな外遊びはなんですか（複数回答可）」

	2年	4年
1位	ドッジボール	鬼ごっこ
2位	鬼ごっこ	ドッジボール
3位	遊具遊び	サッカー

Q3. 「休み時間には何をしますか（複数回答可）」

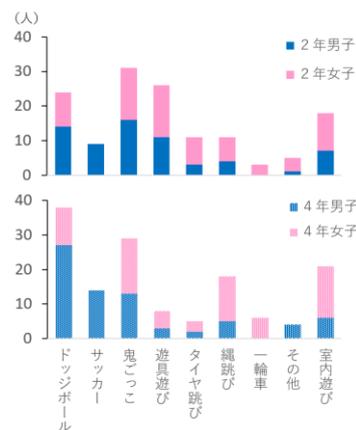


図2. アンケート調査①，②，③の結果。

②「好きな外遊びはなんですか」

1位から順に、2年生：ドッジボール、鬼ごっこ、遊具遊び、4年生：鬼ごっこ、ドッジボール、サッカーであった。

③「休み時間には何をしますか」

2年生、4年生ともにドッジボールおよび鬼ごっこをする児童が多く、室内遊びをして過ごす児童はおおよそ15%であった。男女別にみると、ドッジボールは4年生において男子の割合が高くなるのに対し、鬼ごっこは男女ともに実施されていた。

④「どんな種類の鬼ごっこをしますか」

色鬼、かわり鬼、増え鬼、手つなぎ鬼は体育の授業でも休み時間の遊びの中でも行われているのに対し、しっぽ取り鬼や当て鬼は休み時間には行われていなかった。また、けいどろは休み時間や学級遊びで行われることが多かった。

2. 聞き取り調査

鬼ごっこの種類を選択するときに配慮する事項について、「変化をつけること（種類、広さ）（87.5%）」や「鬼が変わるかどうか（62.5%）」という回答が多かった。一方で、身体を動かすことを目的としている場合に「子供たちの希望を尊重する（37.5%）」という回答もあった。また、「ルールがシンプルであること」、「学級経営を兼ねて協力の度合いを選択基準にする」という意見もあった（12.5%）。調査結果をもとに、協力の有無と鬼交代の有無を軸に分類を行った。実施時間については「計っていない」「全員がつかまるまで」など、明確な時間を設定していないまたは計測していなかった。「何分程度で行うことが多いか。」という問いに対して「おおよそ5分」という回答が多く（62.5%）、次いで「おおよそ3分（25%）」、「おおよそ7分（12.5%）」であった。

IV. 考察

児童へのアンケート調査の結果、鬼ごっこはドッジボールとともに小学生に人気の遊びであり、体育授業だけでなく休み時間にも児童が自発的に実施していることが確認された。一方で、外遊びが好きであると回答したものの休み時間には室内遊びを選択している児童が複数いた。その要因の一つには、調査対象の小学校では、学校図書館の開架時間が昼休みだけであったことも挙げられるだろう。全校遊びや家庭への啓発活動が体力向上につながったという報告（寺井, 2019）や、静岡県が実施する体力づくりに積極的な学校は日課の中に外遊びの時間を確保している（杉山ら, 2018）ことから、子供の体力向上に向けてより多くの児童が外遊びを選択できる学校の取り組みが必要といえる。また、2年生では「外遊びは好きですか」に全ての児童が肯定的回答であったのに対し、4年生では否定的

回答が19.2%あった。近年、高学年での教科担任制導入が進められているが、外遊びに肯定的な低学年期にこそ、運動の楽しさを味わい、運動に親しむ素地を養う体育科教育が重要であることを示している。

児童および教員への鬼ごっこの種類調査では、体育授業において教員がその教育効果や主活動との動きの繋がりを意図して鬼ごっこを選択している傾向があるのに対し、休み時間には用具の準備が必要なく、子供たちだけでも簡単に実施できる鬼ごっこが選ばれていると考えられた。2年生において「体育授業でやった鬼ごっこが楽しかったから、休み時間に友達とやった。」と回答があった。これは、体育授業の「鬼遊び」が外遊びに繋がった事例といえる。体育授業を通して多様な鬼ごっこに触れたり、自分達で作戦を考えたりする活動を仕掛けることで、児童の外遊び誘発効果が期待される。

教員への聞き取り調査結果から、体育授業で鬼ごっこを行う際に、児童が楽しく取り組めるように種類や広さを変えて複数回行っていることが分かった。また、鬼が変わるかどうかという教育的配慮をもって種類を選んだり、鬼が固定の鬼ごっこ（氷鬼、増え鬼など）では、初めの鬼の指名に配慮をしたりするという意見があった。一方で、子供たちの希望で鬼ごっこの種類を決めたり、実施時間を決めていなかったり「なんとなく」鬼ごっこを実施する授業者もいた。加えて、「何分くらいが適切か考えたことがなかったし、分からない。」という意見も複数聞かれた。体育科教材として鬼ごっこを扱う場合、単元計画や授業計画に応じて学習活動を設定することが望ましいが、本調査から複数の教員が困難さを感じていることが明らかとなった。これは、音楽科や図画工作科、家庭科など他の実技教科において指定の教科書があるのに対し、体育科には決められた教科書がなく、教員が授業を組み立てる際に種類別の強度や効果、適切な実施時間などの判断基準となる先行研究がないことが一要因と考えられる。特に実施時間については、スポーツ鬼ごっこ（鬼ごっこ協会）において5分間×2が公式ルールとして定められているものの、その他の鬼ごっこについて実施時間を示した文献は見当たらない。多数の鬼ごっこを紹介している「Hoicle（ほいくる）」や「ミックスじゅーちゅ」などのインターネットサイトにおいても、活動時間についての記述はされておらず、授業者の経験や感覚に頼る部分が多いといえる。外遊びの経験が少ない児童の増加や発育発達および運動経験・技能の個人差への配慮を要する小学校体育授業において、経験の少ない若手教員が増加していることを鑑みると、今後、科学的根拠のある適切な実施時間や種類別強度並びに特徴を示すことは体育指導の質向上に大いに寄与すると考えられる。

V. まとめ

本調査により、鬼ごっこは小学生に人気の遊びであり、休み時間にも自発的に行われていることが確認された。また、体育授業において教育的配慮をもって鬼ごっこを取り入れている一方で、適切な実施時間についての知見を得る必要があることが示された。

参考文献

- 一般社団法人鬼ごっこ協会:<https://sportsonigokko.onigokko.or.jp/sportsonigokko.html> (最終アクセス日 2022/12/01)
- 加登本仁, 辻延浩, 青木作衛, 中川大介, 八木純子 (2012) : 体育授業に関する小学校教員の力量形成についての調査研究 : 教職経験年数による差異に着目して. 滋賀大学教育学部紀要, 教育科学, 62, pp. 73-85.
- 郷家史芸, 松延毅, 松延摩也子, 石田淳也, 本田由衣, 藤田清澄, 香曾我部琢 (2018) : 鬼ごっこ場面における客観的評価尺度を用いた幼児の身体活動と運動能力. 宮城教育大学情報処理センター研究紀要, 25, pp. 33-40.
- 子どもの遊びポータルサイトミックスじゅーちゅ「子どもの鬼ごっこ・鬼遊び一覧」<https://45mix.net/tag/onigokko-matome/> (最終アクセス日 2022/12/06)
- 杉山康司, 長津恒輝, 白井友加里, 橋詰ゆり, 佐藤里香, 鈴木公一, 朝倉徹 (2018) : 静岡県における小学生対象体力アップ事業が5年生および6年生の新体力テスト結果に及ぼす効果. 静岡大学教育実践総合センター紀要, 28, pp. 162-172.
- 高島裕美 (2022) : 教職における多忙の構造と「学校における働き方改革」の展望—新型コロナウイルス感染症への対応からの示唆. 社会保育実践研究, 6, pp. 13-25.
- 寺井弾, 本山司, 岡田良平, 長根わかば, 河村愛美, 本山貢 (2019) : 地域・家庭・学校が協働して取り組む体力向上による学校づくりに関する研究. 和歌山大学教育学部紀要, 教育科学, 69, pp. 163-167.
- 日本スポーツ協会 (2020) 『JSP0-ACP アクティブチャイルド プログラム』
<https://saas.actibookone.com/content/detail?param=eyJjb250ZW50TnVtIjoxMDUzNj19&detailFlg&pNo=1> (最終アクセス日 2022/12/01)
- 花井源太, 青木健, 高田和宜, 厚東佳奈枝, 中村万紀子, 松岡勝彦 (2019) : 幼児期における新しい鬼ごっこを通しての運動能力向上に関する実証的試み. 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 47, pp. 115-124.
- 保育や子育てが広がる“遊び”と“学び”のプラットフォーム [ほいくる] <https://hoiclue.jp/800007224.html> (最終アクセス日 2022/12/06)
- 光村図書出版株式会社 (2019) 『こくご2下』 pp. 82-90.
- 宮口和義, 出村慎一, 青木宏樹, 高橋憲司 (2012) : 鬼ごっこを好む幼児の運動能力特性. 教育医学, 58 (2), pp. 200-206.
- 村瀬浩二, 落合優 (2007) : 子どもの遊びを取り巻く環境とその促進要因 : 世代間を比較して. 体育学研究, 52, pp. 187-200.
- 文部科学省 (2017) 『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説体育編』 https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017_010.pdf (最終アクセス日 2022/12/01)